

特 255

50

孝明天皇の御聖徳

孝明天皇奉祀奉贊會

始



3
5

特255
50



孝明天皇の御聖徳

孝明天皇奉祀奉贊會





孝明天皇の御聖徳

孝明天皇奉祀奉贊會

このたび孝明天皇の御神靈を平安神宮の神域に奉祀相成る旨の勅詔を仰せ出されましたことは、まことに有難い次第でありまして、國民すべてが恐懼感激し奉るところであります。聖旨宏遠、固より草莽の窺究を許しませんけれども、従来久しく民生がおしなべて密かに此事を冀ひ奉つてゐたことでもありますから、君臣一體上下一心の國華を歎び孝明天皇御聖徳の一端を追憶致しまして、感佩報謝の微衷を新にしたいと存じます。

—

孝明天皇は天保二年六月十四日(陽曆七月二十二日)御降誕遊ばされ、天保十一年三月立太子、弘化三年正月御父仁孝天皇が崩御遊ばされたので御位を踐ませられ、慶應二年十二月二十五日(陽曆一月三十日)崩御まで二十一年間御在位でありました。西曆にしては一八四六年から一八六六年、支那では清の道光二十六年から同治五年までに當ります。

此の道光、咸豐といふ頃は支那の最も危い時代でありました。否支那のみでなく東洋全體が非常な恐しい淵に臨んでゐました。英佛、露蘭米等の諸國が蒸汽機關紡績機械等の發明と利用による新商業手段、その背後には新式の歩騎砲兵による陸軍と蒸汽力による海軍の強い武力が伴ふて居ります。その新商業植民政策の爲に、阿弗利加以東はすべて占據分割の危機に瀕して居りました。露國南下の野心に唆かされて埃及王が土耳其に叛き、それに英吉利佛蘭西が介入干渉して、近東に戦禍しげくなつたのは一八三三年からでありまして、その結果はトルコ、エジプト共に疲弊し、露西亞は南下の路を塞がれ、反對にイギリスはアデンを占領する利を收めたのが一八三九年であります。而も英國は、これより以前に印度に於て佛國の勢力を覆し、東の方新嘉坡も和蘭から奪つて居ります。それで此度は、露國の中央亞細亞侵入に對抗して、一八三九年からアフガニスタンに出兵するやうになり、爾來數回の戦争の結果、カシミール、パンジャブの如き廣大なる地域を收め、遂に一八五七年即ち我が安政四年九月には、バベル皇帝以來三百三十餘年の莫臥兒帝國を亡し、國王バハハツルシャールを緬甸へ流しました。

南洋東印度、比律賓などが歐羅巴人に占領せられたのは、是より二百年も前であり

ますが、支那は清の康熙、乾隆といふやうな英主の後を承けて、大きな版圖を持つてゐる。それに緬甸暹羅安南琉球朝鮮等が入貢して猶東洋の覇者でありました。然るところ、此國に産する茶が、新しく西洋人の嗜好に上り、之に代ふるに支那人は埃及、印度に栽培せられ、マンチエスター、リバールで紡ぎ織られる綿布を需要し、殊にガングス平野に産する阿片を非常に好飲するやうになりました。茲に於て、機械工業による商業立國を目ざす英米人等にとつて、支那は非常な利益ある新市場として重要視せらるゝことになつたのであります。加ふるに燈用石鹼用などとして鯨油が需められ、北太平洋に捕鯨船が澤山來ることになりました。ところが以前から露西亞人は、防寒として高價な獸皮を求めてシベリヤを東し、ベリリング海峡を渡つてアラスカに進み、更に南下して一八一二年には今日の桑港邊にもコロニーを作り、爾來革舟に乗り土人を驅使して、狐貂、獵虎等を追ふてゐましたが、一八四〇年頃からは臘、臍、鯨を主とするやうになり、従つてオホーツク海から樺太、千島邊に活動の場所をかへしました。その在任中に、無斷で黒龍江の水路を開いて江口を占領し、且つ北岸の諸地にコザツク兵營を設け、更に樺太南端のアニワ灣と千島の北半を占領し、一八五八年には英佛聯合軍北京占領後の弱點につけこんで愛琿條約を強要し、以て黒龍江

地方を奪取し沿海州を共有としたムラビヨフが、東部シベリヤ總督に任せられたのは一八四七年でありました。而して此のムラビヨフは、安政六年七月我が江戸にも來たのであり、その翌々文久元年二月から八月に亘り、露國軍艦が我が對馬國淺海灣を占據して容易に去らなかつたといふ事件もあります。

アメリカ合衆國はもと自由を標榜して建てられた國であります。その自由も英王政府の課税に對する権利の觀念が動機になつたことを注意すべきであります。そこで奈翁戰爭時代の中立は、北部諸州の商工業を發達せしめ、一八二〇年頃から東洋貿易にも乗り出し、英國人と烈しく競争致しました。つまり今までは支那の茶箱や太平洋の鯨油を歐洲諸國に供給するのは、殆ど英國人の獨占であつたのに、米國が之に介入し、それには米國人の優れた造船術と航海術とが効果を示したのであります。かくて米國人は太西洋をこえ、南阿を迂回して新嘉坡、廣東、澳門等に活動して居りました。その上一八四六から四八年にかけて、メキシコ戰爭に勝ち、西部諸州を得て太平洋岸まで國を擴げたのであります。而もそのカリフォルニアに金山が発見せられて、愈東洋に關心を持つやうになりました。

さて此等の經濟的事情は、歐米諸國特に英國の對支態度を積極的なものに致しま

した。一八三四年英國政府が、從來東印度會社に獨占させてゐた支那貿易權を取上げたのもその現はれであり、續いて一八四〇年には、有名な鴉片貿易を清國政府が禁遏せんとするのを非とし、怒に武力を以て寧波、上海、鎮江等を占領し、一八四二年には南京條約によつて香港を割かせ、五港を開かせ、二千百萬弗の償金を取り、對等の國交を結ぶことを誓はせました。我が天保十三年八月二十九日のことであります。

元來支那は世界の中華と考へ、外國を夷狄視し、通交は朝貢を許すといふ建前のみ取つてゐました。従つて交易は廣東一港に限り、國家の使節は三跪九叩頭の禮を行はねば謁見を許しません。だから此の條約は、支那人にとつては眞實破天荒の大事件であり、殆ど國家とその文化との覆滅とも考へらるべきものであります。況んやこれから、米佛にも國を開き、更に一八五六年には些細なことから英佛との間に悶着を生じて干戈數年に及び、廣東、太沽、天津は陥り、北京の圓明園、離宮は掠奪せられ、皇帝は熱河に蒙塵する辱めまで受けました。一八五八(安政五年)六月の天津條約と、其二年後の北京條約とがその結果として成りまして、支那は全く歐米諸國の無道なる武力の下に屈服し、殆ど分割の端を啓くといふ悲しいことになつたのであります。安政五年六月は我が江戸條約も假調印せられた時、萬延元年は櫻田門外の變があつ

たことを之に關聯して想起致されたいと存じます。

六

二

世界の趨勢は斯くの如く西方東漸、而もそれは近代科學の進歩の上に築かれた武力と經濟力を以て、未だ中世的形態にもあつた東洋諸國の利權を奪取し、その獨立を脅すといふ危險至極なものであつたのでありまして、總じてそれは、遠く十五六世紀の地理上の發見時代から傳襲せられ、特に奈翁戰爭後の新形勢に基く國民主義、自由主義、重商主義の發現であつたのであります。然るに之に對する我國の状態はどんなものでありましたでせうか。實に驚き入つたことであります。未だ封建鎖國といふ段階に止つてゐたのであります。元來封建なるものは、國內を刀で分けて、それにそれ／＼君を置くといふ武力中心の分權制度である。だから、それは恒に、暴力によつて廣い領土を持ち、文武不二の道義的最高位にある王者を僭する覇者が生れます。そして徳によつて基礎づけられない權威を保持する爲に、不當な階級的支配の制度をつくつて、縦にも横にも國民社會を分裂せしめ、終に國民の頭から「國家なるもの」を隠蔽し愛國を以て無用となすに至るのであります。こんな譯で江戸には幕府

があり、征夷大將軍なる、異民族を討伐し來服せしむる爲の武將が、國民の上位に立ち、剩へ全國を二百七八十の藩國に分ち、その領主たる大名を率ゐて文武百般の庶務に互り、天皇の御委任を受けたりと稱して、すべてを專斷して居りました。また諸侯は諸侯で、領内に生殺與奪の權を以て莅む。而もその間には、徳川氏との親疎遠近といふ私情的關係によつて、領土に大小があり、それ等が各々黨閥をなして對立抗争し、幕府はその自衛上暗に之を獎勵してゐる。その上社會的には將軍大名を中心として、主従上下の關係が實に厳しく、個人の材能や努力などはてんで認めない建前になつて居りました。即ち百姓の子は百姓、大名の子は大名、五十石取りは子々孫々まで五十石、かういふ風に決つてゐるのでありまして、人間は生れたときからその一生の運命が規定せられてあり、その行ひも此の通りと定めて要求せられてある。つまり生氣潑刺たる機に臨み變に應じて價值ある活動を爲すべき個人が要求せられるのではなくて、百姓とか武士とかいふ階段に即した生き物型にはまつた人間が要求せられる如き世の中の構造になつてゐたのであります。

且つ夫れ江戸幕府は、かゝる非皇道的な社會構成の上に立つてゐたのみでなく、更に之を助長し永續せしむるに役立つ、鎖國政策をとつて居りました。寛永の昔大船

七

の製造を禁じ、邦人の海外渡航を許さなくなつてから、二百年の久しくも、祖法として之を尊重墨守して居ります。僅かに支那と和蘭に通交を許しては居ますが、それは長崎の一港で一二艘づつに限られて居り、その上一般國民との接觸は許さず、年に一度甲比丹から提出する風説書といふ世界時事のニュースにしても、一切秘密にして國民に知らせません。甚しきは、日本人が航海中暴風に流され、異國に漂着して辛うじて歸つて來ても、打首か終身禁錮かといふ不都合な取締りまでして、國民を、海外の形勢世界の事情から旨にして置いたのであります。

かく國內ばかりを天地と考へ、その中ですべてを型通りに運ぼうとするところに、進歩が生れ向上が現はれる筈はありません。況んや江戸幕府は、更に積極的に、新儀停止といふことを初めから最高方針として居りました。之は進歩發展を阻むのであります。だから江戸時代には、三百年間を通じて、隔世の感を持つといふやうな變化がありませんでした。早い話が、衣食住にしても、慶長前後には既に羅紗やキャラコと言ふ言葉が日用となつてゐたのに、それは明治の初年にも同じ程度に残存してゐたやけであります。藤原惺窩は南行したとき葡萄酒まで飲んでゐますが、嘉永六年六月ベルリが浦賀奉行に贈つた、亞墨利加製十二サンハンウエインと申す大フラ

スコに入つた極上酒は、籠のまゝ焼捨てたのであります。また硝子器は、元祿年間に財産沒收になつた大阪の淀屋などには、澤山使つてゐたのに、明治になつてもビードロと云つて珍らしいものであります。文政元年、頼山陽が西遊の途次長崎に行つて、蘭船に驚き、母梅颯夫人に羅紗を送り、自分は小さい硝子のコップを得て、歡喜愛用措かなかつた如きは、かゝる一面を物語る話であります。

こんな風で、江戸時代初期には、我が國の文明は決して西洋のそれに後れてはゐませんでした。そして廣く活動の天地を世界に求め、異國の文物でも吸收するに努力せしことは、今日想像以上のものが御座いました。而已ならず、進んで我が神國の道を廣め、仁義を四海に布いて、萬國の繁榮を將來せんとといふ意氣込まで持つて居り、豊臣秀吉の外交方針の如き、之を以て貫いてゐたのであります。即ちかゝる意氣と理想とがあつたればこそ、呂宋、ジャバ、暹羅などに日本人町が勃興し、山田長政のやうな義侠的英雄も出たと考へねばなりません。文化の方面でも、林羅山や中江藤樹は、デカルトやホッブスに先立つて生れ、近松や西鶴芭蕉は、シェイクスピアに少しおくれませんが、ミルトンに同じ頃であり、永徳、山樂は、レンブラントにすつと先きであります。つまり西洋の進歩は、悉くその後の、而も自然科学的研究が興隆してからの事であり

まして、それが我國と殆ど同様の事情にあつた支那印度等にもあてはまり、こゝに所謂西力の東漸といふ事態を招くに至つたので御座います。そして幕末になつては、彼は汽車汽船で貨物を安價多量に運ぶが、我は猶帆船漁船で波浪に飄弄せられる。彼は紡績機械で盛んに大量生産をやるが、我は猶座繰と手縫とで遅々として家内の副業としてやる。彼は波濤にも揺がず、大砲を積み數百人を乗せる黒船で威壓して來るが、我は猶舊式の帆船か八丁櫓の小船で、三百年前そのまゝの鳥銃、それよりも主力は、依然として源平時代の弓矢薙刀槍などで當らうといふのであります。種油や蠟燭、さては松明の下、御家流で書いた本を借り集めて寫すのに、彼では印刷機があつて新聞紙さへ發行せられ、電燈瓦斯燈の下でそれを讀む。飛脚があつても入費と日數と容易でないのに、彼には郵便制度があり電信さへ發明されてあります。凡そ此れ程の大きな懸隔があつては、東洋たるもの、どんなに努めても、到底西洋と並立對抗することは到底出來兼ねること、火を賭るよりも明かであります。況んや國內に於ては、久しき太平の餘毒に酔ふて人心弛緩し、特に國民の指導者たる武士階級のもの、が武術を忘れ、其も知行が何代も一定せるため、經濟上の不如意から規定の武備も用意してゐない程の怠慢振り、で、到底即時の戦争など出來兼ねる實狀でありました。

たゞ此は、幕府始め諸藩の戦時體制組織下の絶對秘密主義によつて、比較的外部に知れず、従つて舊來の餘威によつて維持する所があつた故に、辛うじて表面を糊塗し得るといふだけの事情でありました。

されど、元來伶俐にして進取倦まざるは、我日本民族の本性であります。徳川幕府の退嬰的傳統政策によつて、世界の東勢時代の動向から目を塞がれてはゐたものゝ、そしてその結果は鬱屈磊塊の元氣を遣るに由なく、鄙俗に流れ遊惰に耽り、小事に踟躕するといふ弊風にも陥りましたが、さりながら一面には、過去數百年の間に蓄積吸收した日本文化を、一層陶冶洗鍊して、それを完成した形にまで突き進めるといふ立派な事業も成し遂げました。それは、今日我々が猶享受してゐる、日常の生活用具からその諸規式例へば着物とその製法着付方、或は座敷とその裝飾、食物とその料理及び風味の味ひ方、贈答の仕方などより、冠婚葬祭に至る儀式的宗教的行事が普及して、國民生活の内容を充實するに至つた一事で、了得されるのであります。又政治經濟の方面から言つても、國內に於ける色々な現實の事情が、割據分争の戦國氣習を不便として、事實上全國が大阪を中心とする單一國民經濟組織をなすに至つてゐた

のでありまして、此等の點には幕府が諸大名を制禦するため、苦心經營して厲行した、中央集權的諸政策も大に關係し貢獻してゐることは認めねばなりません。

かくて自然科学、物質文明の方面に於て、西洋に甚しく後れただけで、精神的文明の方面に於ては、日本の學問と藝術とを大に深化普及させたのであります。御覽なさい。文化文政から天保にかけての、漢學詩文和歌俳諧書畫音曲等あらゆる方面に巨匠の輩出せることを。そして之は、三つの方面に於て特に注意すべきものがあります。第一は長崎といふ一小港を、而もその中の蘭館と唐人屋敷といふ二小區域を通じて、微かに射し込む西洋文明の光を鋭敏に感受した。危険を犯し迫害に窘みながら、醫學兵學自然科学の知識採收に汲々たりし蘭學者。此の内からは、國家の危急は西力東漸にありとして、夙く海防論を唱へた林子平や、理由なき外人打拂ひは國家の損失を招くと憂へた渡邊華山、高野長英、或は、方今の急務は先づ砲術を究め、海軍を建つるにありと大聲疾呼した高島秋帆、佐久間象山等があります。そして孰れも繚纏の辱を受けねばなりません。次の一つは本居宣長、平田篤胤等に代表さるゝ國學者と、高山彦九郎や藤井右門などによつて推察すべき崎門派の王室家。前者は、國史國文特に古代史の研究によつて國體の淵源をきはめ、皇道の本領を明かにせん

とするものであり、後者は漢學の王道主義、名分論の主張から武家政治を批判し、その存在を拒否せんとする熱烈な實行主義者でありました。第三は一般漢學者の中に於ける實學派ともいふべきもので、詞章記誦の風流學よりも、治亂風興敗のあとをたづね、經濟民の實道を研究するを學者の使命なりと考へた一派で、古賀精里、横井小楠などその代表的な人としてよいかと思ひます。尤もこれ等は時代の優れた先覺者達で、神州の元氣の宿つてゐる人々でありまして、従つて、多かれ少かれその全人格の内には、どの主張も取り込んでゐる。その尤もよい例としては、徳川齊昭や藤田東湖、會澤堪齋に代表さるゝ水戸學をあげることが出来ると思ひますが、然し實際になると理想的に統一せられて發現することが出来ませんでした。例へば皇國の道は、内外を該ね萬邦を超える博大なものであるとして、洋學も採用し反射爐もつくりながら、極端なる華夷尊卑の國粹主義のため、融通のきかぬ排外論になつたり、神儒を尊信し佛老を崇敬すといひながら、日本佛教の本質を理解せざるが如き事實の時に起るなどこれでありませぬ。之は國學者實學者も同じであつて、殊に西洋人は之を犬戎視し、その巨砲大艦も、寶刀一閃すれば直に覆滅するやうに考へて居りました。經濟上に於ても、日本は萬物足り備へた國で、交易は、我が有用なるものを奪つて彼の無用な

ものに代へる有害なことであると、一般に信じ切つてゐたのであります。

一四

三

孝明天皇は、以上の如き内外の形勢の中に、大御位を繼がせられました。そして其年八月には、早くも幕府に向つて、「近年異國船が時々見える由、それに付ては小寇を侮らす大敵も畏れず、神洲の瑕瑾にならぬやうに圖れ」といふ趣の御勅諭を遊されしました。創立以來、幕府は政務を専行して、朝廷の御口入は一切あらせられぬことにして居りましたから、之は正に破天荒の御沙汰であらせられました。特に「イギリス清國を侵し、往々くは危く相見ゆる由」などまで洩れ仰せられたといふ御聰明。僅に御十六歳の御弱年ながら、いかに天資英邁にまし、たかを察し奉り得る次第で、何とも畏き極みに存じ奉ることでありませぬ。その後嘉永三年四月には、神宮石清水賀茂松尾平野稻荷春日及び仁和寺東大寺興福寺延暦寺園城寺護國寺廣隆寺の七社七寺に、外寇無事萬民安樂寶祚長久の御祈禱を捧げ、重ねて幕府に外交の事を奏聞する様御督促を遊されました。ベルリ來航以前といへば、正に江戸時代文化爛熟の時運に屬し、朝野をあげて太平の毒酒に酔うてゐたのであります。これこそ何といふ有

難き大御心でありませうか。先憂のみあつて後樂もないといふことが、まこと御一生を貫いて、御躬行遊された御蹟に偲び奉る事實で御座います。

その後三年すると、有名なベルリ提督の浦賀來訪がありました。が、メキシコ戦争の司令長官として武勳正に赫々たり、今又東洋問題の研究家として深き輿望を負ひ、印度支那艦隊司令長官に任せられ、巨額の入費と四年の歳月を費して、アメリカ國民の自由通商と、捕鯨船及び上海廣東往復船の寄港地として貯炭所を設けること、若しその談判を將軍及びその執政が拒むに於ては、武力を以て日本國中の港を閉鎖し、琉球小笠原の一部は占領もせんとといふ覺悟で來た此の提督の態度は、從來幾度となく來た米英佛魯の使節と甚だ違つて居りました。殊に彼の遠征記には、東洋人に對し或事を決行せんとする時は、先づその方法を熟考して手筈を定め置き、一度之を發言したる上は、容赦も猶豫もなく之を強行する態度であつたと明記してあります。だから、六月三日、堂々我が警衛の柴舟軍船を歴した千七百噸の火輪船が射つた大砲は、我が幕閣に、恐慌を來し三十八萬六千人の大動員計畫を立てしめ、それから數日の押問答で、久里濱に於て國使に對する禮を以て正式接見をすることを承諾せしめ、數百人の大工を送つて晝夜兼行式場を新築せしめ國書を受理させました。此時ベルリは

一五

軍樂隊を先登に、實彈を込め着剣抜刀せる八百人の衛兵を引連れ、歩武堂々乗り込み我國人に目を側てしめました。勿論四艘の軍艦は煙突から黒煙を騰々と吐き、砲手は一刻も失はじと照準を狙ひ續けてゐたのであります。式はてゝ土産物の贈答ありしも、日本側ではすべて海岸に持ち出して焼却する有様、ベルリは十日出帆の約束を故意に破つて、遠く羽田沖まで北行し、江戸城市を睥睨して十二日悠々と出發する。江戸城中では、將軍危篤のところ、夜中早鐘を亂打して非常召集を行ひ、上を下への大騒ぎを演じました。而も武藝忘却經濟不如意の旗本達には、鉢木武士の古風格はなくて、武具馬具師アメリカ様とそつと言ひと諧謔されたといふに於ては、今でこそ易々と阿片戦争後の新事態を了得するものゝ、當年に於て之を了察してゐた人は、ほんの先覺者を措いては全くこれなかつたことを知るべきであります。

十分に威嚇したベルリは、來年返書を授受するといふ約束の下に一旦引上げたのであります。その翌七月には、長崎に露艦が來て同じく開國を要めました。これは江戸に注進の使者が行つて交渉するに暇どり、その上態度溫和で翌春引上げました。が、翌安政元年には、早々(正月十二日)またベルリが、江戸灣深く入つて來ました。今度は十二艘の大艦隊。砲口をひとしく江戸に向けて、満足な回答を得ねば一步も退か

ぬといふ強硬さであります。竟に幕府も、林大學頭を全權委員として、神奈川で和親條約を結び、下田箱館に於て薪水食糧を給與し、十八ヶ月の後その商務官が下田に駐在することを許しました。此時も幕府は旗本及び諸藩士を動員し、弓矢、鐵砲、鎗、兜、旗指物といふ姿で、海に陸に彼を取り巻いたのは前回通りであります。それは少しも彼等の押へになりませんでした。大砲一發、鎗武者は動けなくならう。軍船は火事見物によろしいといふ見幕でありました。然し一面には、彼からも我を招待して大宴會を催し、ジャンパンに蹣跚たる我が一官吏が、彼の士官の肩にもたれ、「日米同心」と氣焰をあげたり、彼より將軍家への獻上物たる汽車模型の試運轉には、喜んで箱車の上に馬乗り、跨り、電信機の實驗には、注意をこめて細圖をとつたといふ朗話も御座います。我からは、力士をよんで國技を見せたり、それに贈米を運ばせたりして威武を示さうとしましたが、これは効果はなかつたやうであります。とにかく初めから舐めてかかつてゐるのが向ふの態度でありました。

日本の鎖國を破らせるに成功したベルリは、三月神奈川を出帆し、下田に廻ります。と、此の新式なる異人の軍艦に乗り込み、彼の國に渡つて、その國情を探り、文明を實知しよう。これが夷人を制し皇國を護る最良の道であると決心して、神奈川から追か

け來り、夜中ひそかに舷側に漕ぎつけた二青年がありました。長州の小身武士吉田松陰と金子重輔と即ちこれで、ペルリが國約は守らねばならぬと決裁指令した爲に追返され、幕吏に捕縛されました。その懷中に、信州松代の軍學者佐久間象山の祖道の詩があり、爲に象山も蟄居の身となりしことは、普く知れ互つてゐること御座います。

それが治まると、同じ年の九月には、出しぬけに去年來航の露艦ヂャナ號が、大阪灣に入つて來ました。實は此の船は、當時露土戰爭に英佛が介入して居り、爲に支那沿岸に於て英佛の軍艦に追ひ廻はされてゐたのでありますけれども、我に於ては何處の船ともわからず、たゞ要求侵寇のためと解して、紀州以下大騒ぎを致しました。殊に京都では、夷人の大砲は數里に届く故、吉野あたりへでも風聲を御移し申す外はあるまい。それについて武家は海岸防禦の大役があるから、京都は東西本願寺の僧侶を召集して之に警衛を委ねよう。公家朝臣の輩は、妻子は所縁を以て地方に避難せしめ、いつでも供奉の出来るやうに用意せよといふ御觸でありました。だから浪人でも坐視出來ぬと、病妻と飢兒とを打ちやつておいて、大阪まで馳せ下つたのは儒者梅田雲濱でありました。死別か生別か、今朝挺身して國難に赴く我が志は、たゞ皇天

后土が知つてゐるといふのが、この慷慨家の心でありました。

以上嘉永六年から安政元年までの記述には、種々の解釋を導くものがあります。特に西力が始めてその眞威を認められんとしたこと、そして之によつて、我が國民の間に數々の反響を喚び起し、國內に混亂をもたらした。「癸丑甲寅の際より、天下鼎沸して振蕩十五年、丁卯の復政に至つて收まる」といふもの、即ち之であります。然し此の復政は、決して單なる王政復古に終つたものではありませんでした。それは言ふまでもなく、萬機御一新であつたのであります。七百年來の武家政治が仆れたのみでなく、版籍奉還、廢藩置縣、秩祿廢止となつて封建制度が亡びました。そして萬機公論に決する聖旨により、武斷專制の中世的形態は終りを告げ、立憲公議、庶民參政の近世的形態が代つて生れ出たのであります。身分階級の差別嚴しき武士中心の社會制度、經濟組織は廢せられて、四民平等、機會均等の有難い御代が開けました。鎖國自給、國民の元氣を強めて極東群島中に壓縮する退嬰主義は、開國進取、有無五大洲と相通じ、以て仁義を八紘に光被せしめ、皇道を發揚せんといふ明らかき積極主義の時勢となりました。げにや、かゝる大轉換、大變革のなさるべきに於てこそ、あの如き大混

亂、大變轉が聞せられねばならなかつたものと思はれます。

だから此の大騒ぎは、色々の解釋を與へるといふのでありますが、先づペルリがあの如く強壓的に出でて、我方では鎖國は祖法なりと言明し且つ信じ乍ら、從來の打拂令に似ず之を斥けることが出来ないで、遂にその要求を容れたこと。これは我が武備の荒廢し、人心の弛緩してゐることもありますが、もつと有力には、幕府財庫の空虚な祕事が原因で、この驚くべき事實の前には、即時膺懲、開否自決の最硬論家たる水戸前中納言齊昭でも折れざるを得ませんでした。而も封建抗爭の建て前、幕府は之を口外することは斷然出来ません。それでなくてさへ、外様以下の大名を抑へるのに、惟れ勞してゐたではありませんか。だが近代科學の結果を應用し、經濟的利權を吸收して、文明の惠澤を享受せんとする歐米國民主義侵略運動の前には、どうしても舉國一致、總國民團結して之に當らねば到底國家の獨立も保つすることが出来ないといふ事實が、意識的ならずとも幕府者の心中深く啓示されて來ました。上は朝廷に奏聞し奉り、中は公卿有司、諸侯に諮問し、下は旗本、陪臣にまでも、上書進言を許して廣く衆智を蒐めるように致しました。正にこれ武斷專制の基礎に立つ徳川政權の廢棄と言つてもよい位の大轉廻であります。之は決して、時の首席老中阿部正弘が

圓滿な人格者だつたからといふだけのものではあり得ません。

それにまた、今度の外艦渡來を國家危急存亡の重大事なりとして、草莽の微臣ともいふべき吉田松陰や梅田雲濱などが飛び出しましたこと。而も此等の人々は、皆御威光を憚からず、政道を亂すといふ靡で罰せられたり、容疑者となつたりするので、とにかく天下に志士なるものが簇出する。その志士は、義の命するところ、一身一家を犠牲にし、主君に迷惑をかけぬ様にと脱藩してまで國事に奔走し、多くは屍を鋒鏑に曝すのであります。何といふ悲壯、何といふ勝烈なことでありませう。而も此の人達が志す所は、全く國體の尊嚴と皇位の神聖、それは一に京都に殆ど虚位を擁しますかに見え奉つてゐた我が孝明天皇に於て、具體的な目標を持つてゐるもので御座いました。それ故に甲寅以來萬死を冒して蹶起し、而もそれは、死すとも朽ちずと安心立命してゐた松陰でも、猶獄中、今上皇帝今公を見捨て、先づ黄泉へは行くべからずと覺え候〔與野村和作書〕と書いたのであります。

思ふに志士の活動こそは、維新史の中核、我が三千年國史の精華であります。また萬機公論に決し、上下一心して經綸を行ふことは、畏れながら維新改革の眼目、明治天皇聖旨の籠らせ給ふ處と拜察致します。然るにそれが、前者はあのやうな衷心の希

求に於て生き、後者は最もそれを拒否する傳統を堅持してゐた所の幕府者自身が、卒先改心して、廣く衆智に聽くの態度に變つたことは、全くこれ我が孝明天皇の御稜威御聖徳の致せしものと解し奉る外はないのであります。殊に況んや、前から幕府の專政には四民に不平の聲しげく、言路洞解の要求は隱約の裡道塗に溢れてゐたことと、天皇が夙に海禦のことに軫念を勞し給ひ、故格を破つて海防を直諭し奏聞を督促し給ひしことは、期せずしてその揆を一つにしてゐるもので、上下一心と申しませうか、幕府諸侯といふ中間遮者があつても、わが君とわが民とは、恒に靈光相照らしてゐたわけで、眞實御徳澤の治きに感激せざるを得ぬ次第であります。

四

斯のやうに彌高い御聖徳は、これから外交問題の複雑なる進展に伴ひ、困難な事件が積重なるにつれて、益々民生を潤ほし、所謂志士なるものが簇出するやうになりました。即ち安政三年七月には、商務官ハルリスが來朝し、その翌四年には入府登城して將軍に見え、世界の大大勢を説いて通商條約の締結を迫り、それが出來て勅許を奏請する段になると、數年來の論争正に白熱點に達して、終には戊午の大獄といふ悲しむ

べき事件までも起りました。正にこれ、天下幕府の恃むべからざるを知つて、只管に御稜威に縋らんとした變り目と申すべきであります。此の時七十餘人の志士が一網打盡されましたが、それ等の人々の衷心の叫びは、例へば月照上人の辭世、大君のためには何か惜しからむ、筑摩の瀬戸に身を沈むとも、に遺憾なく現はれて居ります。然しこれは全く、天皇無量の恩徳が十方無碍の靈光となつて、萬民の上に浸透霑被してゐたからのものであります。

朝夕に民安かれと思ふ身のこゝろにかゝる異國のふね

日々のふみにつけても國民の安き文字こそ見まくほしけれ

様々に泣きみ笑ひみ語り合ふも國を思ひつ民思ふため

すまし得ぬ水に我身は沈むとも濁しはせしな四方の民草

何といふ恐れ多い御述懐どもでありませうぞ。朝と言はず夕と言はず、御いぶきの通うてまします限りのいつでも、絶ゆる刻みなく民草の上を御いたづき召されて御座しましたその温き御心ねの御露が、いかでそゞぎ潤さぬことがありませうか。我が一家一門とその周圍の親しき一統とのみの幸福永續を中心とする覇政が、こゝに期せずして擯斥せらるゝに至りしも、まことに自らなる勢なりしこと、言はずして

感知せしめらるゝのであります。

そこで事實を如實に探究致しまするに、國學者の努力により所謂尊王論が盛となり、以て王政復古の時勢を導き出したといふよりも、國家の非常時に際會して、おのづから我々の中心、生命の根源は皇室にあらせられるといふことが實感せられ、その境地に於て尊王論が新しき生氣を伴つて信奉せらるゝに至り、茲に澎湃として大河の決するが如く、思想界を席捲することになつたと考ふべきであります。

此の意味で幕末の尊王論は、勤王論と名づけ、以前のそれと區別するがよいと考へる人もありますが、とまれ皇室推戴の思想が頓に勃興し、且つ之は關東と言はず諸藩と言はず、士分と言はず、町人と言はず、國民全體を通じての現象でありました。とは言へ幕府は、從來長く、陽に皇室を尊ぶも、陰に之を抑制し奉つてゐたのは事實である。また尊王思想なるものは、幕府否定の氣分に強く彩られてゐたのも事實であります。だが又思ふに、既に一つの制度が歴史的に存在し、而もそれは同じく神州の民として、皇祖皇宗の恩徳に生きて來たその臣民たるものゝ社會に生じ繼續して來たについては、必ずや何等かの理由があつた筈であります。随つて、從來と言ふよりも幕府成

立の當初から、夙にその存在に對する一種の解釋は出來て居りました。源賴朝や徳川家康が、當年朝廷からも功臣を以て遇せられたのはそれによるのであります。彼等亦皇室尊崇の誠意と功績とがなかつたとは言へぬのであります。だから幕府者にも尊王はあり、反幕者にもあつたわけで、尊王の程度順序、形式等の具體的内容には差がありました。凡そ尊王家ならざるものは一人もありませんでした。此點では所謂討幕と佐幕の對立を、尊王と佐幕の相違と考へるのは誤りであり、存するものは討幕尊王か佐幕尊王かだけであります。これ實に、唯り我國史の上にも見られる所で、深くその原因を探る必要があると存じます。

と言ふのは、甚だ恐れ多いことで、御座います。江戸時代の我國民は案外國體の認識に暗く、一般には、幕府あるを知つて天朝あるを知らずといふ状態さへ存して居りました。これ幕府の權威が強く、全國民を自由に支配するのみならず、朝廷に對し奉つても、御兩敬と言つて、對等の如き文言使用の慣例を持つて居ります。公家の任官は關白議奏の如き當役は勿論、單なる位階の選敍でも幕府の容喙があり、武家傳奏といふ顯職は、拜任の際所司代役所に行つて血判誓約もさせられます。その所司代は二條城に居り、御所附近には御附武家といふものが屯して、警衛といふ名で監視を嚴

重にして居ります。孝明天皇御宇下の文久二年からは、今の京都府廳の所に守護職といふものさへ置いて、見張をしてゐたものです。かくて朝廷と國民、特に諸侯との交通を極端に取締る。朝臣は京都を離れて旅行することも出来ませんが、諸大名も入京は許されぬ。西國の大名は、江戸へ參觀交代の途筋に當つてゐても、伏見から山科へ出るのであります。主上の行幸などは、寛永年間三代將軍家光上洛の時から廢絶して居ります。全く皇室と國民とを疎隔し奉らん魂膽からであります。文久元年近畿一帶に飢饉があり殊に山城がひどかつたので、孝明天皇は御乏しき御内帑の中より、山城は累代御料たる特別縁故の地なるを以て、御救恤の叡慮を仰出されましただけけれども、所司代は之を阻止し奉り、その爲に再三江戸との間に往復まで累ねしめられました。が、それでも、政道は御委任を蒙り、窮民救助のことは手脱りなくやつてゐますからとて、どうしても御請け致しませんでした。將軍やその一門の誕辰薨去等には、仕置をやめたり歌舞音曲を停止したり大騒ぎをするのに、皇室の事には之を指圖致しません。最もひどいのは、寛政年間の尊號一件で、光格天皇の御生父閑院宮典仁親王に、太上天皇の尊號を上られんことを廷議にかけたといふので、議奏中山前大納言と傳奏正親前大納言を江戸に召下し、訊問した上處罰したことがあります。ま

た主上は、政道武術に御勘能あらせられぬやう、御學問御藝能の内容まで規定し、朝臣はつとめて文盲にするために、學校も設けません。その言論に對する取締りも嚴密を極め、南朝を正統としても、豊臣氏を追慕しても、禁板するのであります。寶曆八年の竹内式部一件、明和四年の藤井右門一件にしても、公家衆の國體研究に對する壓迫でありました。こんな事情から公家の間には、政治の實權を關東に委ね、朝廷は祭儀禮典の名位に御座しますこそ、皇統無窮朝廷不易のために、皇太神宮より圖らせ給ひしものであると考へた人もあり、本居宣長などでも、東照神君撥亂反正の勳功は、天照大神の大御心に叶ひ、天神地祇の加護される所であるから、其の御おもむけに背かず違はぬのがまことの道であると記して居るのであります。

事情かくの如く、幕府の存在は久しく是認されてゐるのであり、その權威は海内を覆うてゐるのでありますから、いかに國體の本義上幕府の存立は許されず、尊王佐幕でも悪いとわかつて、さして直ちに之を庶幾することは事實上至難事でもあり、政策上にも失ふ所多く、順序をふんだがよいといふ次第でありました。聰明かの如くにましました孝明天皇は、勿論此等のことはすべてわかりぬいてあらせられましたので、一に民を思ひ國を念じ給ふ大御心から、すべての非道理と過失とを御一身に引受

けて、皇祖皇宗、天神地祇の御前に詫び謝まる御態度を御採り遊して在らせられました。元治元年將軍家茂に賜つた御宸翰の中に、「今や國家の危急實に累卵の如し、又焦眉の如し。朕之を思ひて夜も寝ぬる能はず、食咽を下らず、されど是則ち汝の罪に非ず、朕が不徳の致す所、その罪朕が躬に在り。天地鬼神夫れ朕を何とか云はん。何を以て祖宗に地に見ゆることを得んや」といふ悲痛な御言葉があらせられました。何といふ畏い御自責でありませうか。かういふ無邊の御仁慈、至上の御道心が、反幕と佐幕の別なく、ひたすら天日を仰ぎ、封建制度の地盤に位しながら、舉國一致してかの恐るべき外力の乗する機會なからしめ、且つ初めは、幕府を奉じて天朝を尊ぶ旗幟の下、因襲久しき國體の庇曲をなだらかに是正し、僅々十數年の間に幕府自らその長き傳統となりし對京都政策を根本的に改めて朝廷尊崇の實をあげ、次いで斷然大政の返上を奏請する機運が出来上つたのであります。禁裏の供御が増し朝廷の禮式が復興され、御行幸もあらせられ、學習院も出来、幕吏をも直接黜陟なさるゝ様になりましたなど、すべて幕府が御聖徳御稜威に感格覺醒して、進んで奏請懇願したために現はれた輝しき御政績であります。

五

天皇が、御即位の初より最も御心を勞し給ひしは外交のことでありまして、特に安政以來は一日の御安き日も在らせられず、「夜も寝る能はず、食咽を下らず」と仰せられる恐多さで御座いました。これまさしく、西力東漸の意義重大なることを御洞察あらせられての結果で、御明敏驚き奉るのであります。又一つには外交のことに對する朝野の無知より、開鎖の措置一定する所なく、之が佐幕反幕と入り亂れて、非常な内紛を醸し世の中を騒せたからでもあります。元來本朝は排外拒異の國でなく、宇内を家とするのでありまして、天皇は之も御存じであらせられましたから、決して無謀な鎖國などは好まされず、たゞ寛永以來の餘習、外人を夷狄視し、内に足るといふ尊内觀などの薰染し、且つ洋夷の多知奇器に對抗し難くて、國家の衰弊、支那印度の覆轍を踏み、金匱無缺の國體の瑕瑾となつてはと慮られました。ですから、責任者たる征夷府に自信があれば、御任せになり、それがはつきりせねば御許しにならなかつたのでありまして、安政元年の和親條約はすぐ御嘉納になりましたが、同五年の通商條約は慶應元年十月まで勅許あらせられなかつたのであります。

だがその勅許は、日本外交の確立をなすものでありまして、ペルリ渡來の際から海外に渡つて彼の國情を探らうとした志士の心や、西洋文明を入れて我が國利民福を圖るといふ新學者の願に顯現した正氣が、天皇の上に厚く宿りませし御證據で、開國進取萬里開拓の明治の御代の芽生えを、十分に認め奉る次第であります。かくて天皇が御即位の砌から外交に意を注がせられたのは、小寇とて侮らず、大敵とて畏れず、我備を十分にしておくことが大事であるといふ御方針からでありまして、その叡旨を奉じ、幕府も或は講武所を設け、或は軍艦を購ひ海軍を傳習し、或は新陸軍を興し洋式訓練を始めるなどして、大に尙武の風を興したのみでなく、蕃事取調所をたて、世界の事情を知り西洋の文明を探ることにつとめ、藩藩も之に倣つたので、文弱侈靡と退嬰保守の弊風が大に改められました。文久年間には御親兵を置かれたこともあり、これが光榮ある皇軍御復興の濫觴であります。

孝明天皇御一生の御行實を、廣く時代に關係づけて窺ひ奉りますと、かく國の内外に根本的な大問題が横つてゐて、そこから次々に非常に困難な事件が續出して參りました。恐らく日本開關以來の、複雑多難な時勢ではなかつたでせうか。故を以て

國民も、如何に民は由るに足り知るを須ひすと倣されたりとて、安閑たるを許さず、政治圏内に進出せざるを得ませんでした。そして全國民が國策を考へるやうになつたのでありますが、その解決が中々容易でないので、過激躁狂な人々も澤山輩出しました。そしてあの走馬燈のやうな、朝三暮四、變轉極りない世の中となり、遂には黨同異伐、斬奸暗殺相つぐ物騒な時勢にまで發展したのであります。これは全く時局の餘りに複雑多難なため、皆人が迷惑し、曾て定見がなかつたからであります。然るに唯り我が孝明天皇のみは、最も早くから之に心を勞し、而も己を虚うして倚られる所があらせられたからであります。明々察々、毅然として動かぬ道を、一筋に歩ませられました。まことに巨巖の波間に屹立するが如き御存在。それがいかほど國家國民の光明となり福祉となつたことでありませうぞ。恐らく天皇いまさざりせば、あの疾風つぎ／＼に吹きまくつた時に、日本は收拾すべからざる紛亂に陥り、その内訌のために、醜虜の辱めを受けしこと、他の東洋諸國の如くなるを免れ得なかつたのでありますまいか。思ふて茲に至れば、天皇こそは、正に天照大神以來、祖宗の神靈のそのまゝにあれまし、現人神に御座せしことを、強く深く信仰せしめらるゝことで御座います。曾て近衛左大臣への御勅旨に、

日本に於ては、忝くも子孫相續正統にして他統を用ひず、神武帝より皇統連綿の事、誠に他國に例なく日本に限る事、偏に天照大神の仁慮、言語に盡し難く尊崇盡くる期なき事。

といふ御意があらせられました。まことに恐縮至極のこと、かゝる御明識と御敬虔とが、實に御一代生活の御中心であらせられました次第で、殊に以て、我等臣子全部が、御神靈に對し奉り、恭敬拜持して居るべき心懸であると存する次第で御座います。

本稿は孝明天皇聖德奉彰の爲に本會參與德重淺吉氏の謹纂せしものに係る。

昭和十三年五月五日印刷
昭和十三年五月十日發行

〔非賣品〕

發行所

京都市左京區平安神宮内
孝明天皇奉祀奉贊會

印刷者

京都市下京區北小路通新町西入
須磨勘兵衛

印刷所

京都市下京區西洞院通七條南入
内外出版印刷株式會社

終

